



音声・音響情報処理および 音響信号を用いた生活空間情報システムの研究

～「音から情報を得る手法」と「音に機能を持たせて提示する手法」の組み合わせによる音情報の活用～



研究シリーズ概要

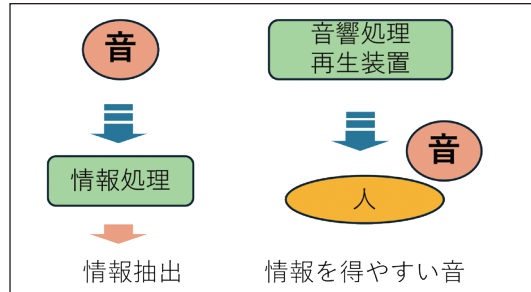
私たちは日常生活において音から様々な情報を得ています。目で見えていなくても、音から人やモノの様子などを把握することができます。音には様々な情報が含まれており、その情報を抽出することによって、人々が無意識に判断しているようなことを、機械にも行わせることができると考えられています。一方、人間にとっても音で情報を提示することは、画面等を見ることを強要しないため、日常生活や作業中などでも有効です。再生装置や音響処理の工夫により、人が音から効果的に情報を得ることが可能になります。

本研究では、生活環境において、音から情報を得るための手法、また人に音を提示するための手法、それらの技術の評価手法等、音情報を活用する情報システムのための技術を研究しています。



利点・特長・成果

例えば、日常生活での音を集音し、分析することにより、人の行動の状態などを分類し、後日見直すようなことが可能になります。さらには再生処理や装置等の工夫で、特定の人に音での情報を与えたり、複数の人の声が混ざっている場合でも聞き取りやすくしたりするようなことが可能になります。また再生音の良し悪しの評価のため、利用シーンに合わせた音の評価法を提案出来ます。



図：音から情報を抽出する技術、人にとって効果的な音を再生する技術、それぞれについて取り組んでいます。

その他の研究シリーズ

■混在した音の中から目的の音を抽出する ■音声、音響の品質をわかりやすく可視化する



キーワード

音声・音響情報処理、音響工学、音響通信システム、ライフログ、音コミュニケーション

本技術に関し、対応可能な連携形態（サービス）

知財活用	否	技術相談	可	共同研究	可
施設機器の利用	否	研究者の派遣	否	技術シーズ 水平展開	可

開発段階

5	第5段階	製品・サービス化（試売／量販）段階	2	第2段階	試作（ラボ実験レベル）段階
4	第4段階	ユーザー試用段階	1	第1段階	基礎研究・構想・設計段階
3	第3段階	試作（実証レベル）段階			

SDGsの目標

8 働きがいも
経済成長も



11 住み続けられる
まちづくりを

